

叢 説

ランプレヒトを憶ふ^(一)

文學博士 坂口 昂

目 次

- 一 緒言
- 二 修學時代
- 三 ライン時代——「獨逸史」の準備
- 四 ライプチヒ時代前期——「史學論争」
- 五 ライプチヒ時代中期——「獨逸史」の完成、史觀の出處
- 六 ライプチヒ時代後期——「文化史世界史」の計劃、史觀の發展
- 七 史學史上の位置

一、緒 言

諸君！獨逸の史界は、ローマ研究の碩學モムゼン^(二)の凋落で最後の將星墜つと稱せられたが、而

も爾來尙ほ群星燦爛四方を光被するの概がありま
す。この間、豊富なる思想と不斷の企業的活力と
を以て、畢生を文化史の確立に傾倒し、如何に最
小に評價すとも、最も人氣があつて最も名聲を江
湖に馳せた最大歴史家の一人、教授カール・ラン
プレヒト博士^(三)につきて、偶その悲壯なる臨終の一
周年に際する本會開催に當り、先年往訪の宿縁も
あり、かたぐ之を憶ひ起すを許されたるは、私
の尤も光榮とする所であります。この際、私は偉
大なる故人に對し、最も思出深き敬虔の念を捧ぐ
ると同時に、史學史の科學的尊嚴に對し、自ら重
大の責任を感せざるを得ない次第であるのであり
ます。

(一)大正五年五月二十七日史學研究會講演

(二)Theodor Mommsen, 1817-1903

(三)Karl Lamprecht, 1856-1915. V. 10. 以下單にランプレ

トと呼び何等の敬稱を附しなす。

二 修學時代

さてランブレヒトは一八五六年二月二十五日、昔はザクゼン選舉侯領、今はプロシヤ王國領ザクゼン道なるイニツセン(Insens)といふ田舎町の一牧師の家に生れた。時は、彼の生涯と多少關係ある學者の年代を引合に出せば、まさしく近代實證哲學の祖コント(Comte)永眠の前年、文化史學史上一新期を作成すといふブルクハルト(Jakob Burckhardt)の名著『イタリヤの學藝復興の文化』將に出でんとし、唯物史觀の大立物カール・マルクス(Karl Marx)は殆んどその活動の絶頂に達し、ランケも亦たその學風老熟の境に入り、バワリヤ國王の御前に『近代史期』の特相を講述して一年有半ばかりであつた。塲所は、中古獨逸國民の東方拓殖の一方面、上ザクゼン・チウーリンゲン文化地帶、獨逸個性の權化たるルテル活動の發程點、ウイッテンベルグを東に距る遠くないところ、平

和なる黒エルスタ河上の一小邑であつた。故人に緣故ふかきケヨツチケの證言に據ると、幼少なるカールは、國王ヴイルヘルム一世即位の祝典が邑の市場で舉行されて父牧師がいみじき祝辭を演じたのを、永く記憶して居る、是れランブレヒトの最も若き思出である、このことである。⁽⁴⁾

かくて、嘗て對ナポレオン革命時代に於けるランケの如く、獨逸統一の非常時期に學窓の人となつたランブレヒトである、その幼時から自ら愛國の至情を涵養されたのは偶然でない。最初は自然ウイッテンベルグに通ふた。次にはシュールプフオルタ(Schulpforta)を志した。この中學は獨逸文化史上因緣淺からぬザール河畔、チウーリンゲン山中の入口に在つて、教會改革の風雲に際して、僧院から改造された有名な君主學校の一で古來幾多の名士を輩出した。詩人クロップシトツクも、哲學者フイヒテも、ランケも、ニーチエもその内

にある。現獨逸宰相ベートマン・ホルウエヒの如きは實にランブレヒトの同窓の友で、恐らくは同年級であつたらう生年を同うす。時の校長は歴史的文化的古典的思想に富んだ良教育家ヘルプスト (Heubst) であつた、後に『近代史林』を著はしたその人である。かゝる幸福なる環境がランブレヒトに及ぼした感化はおのづから強大であらねばならなかつた。彼の後年の告白だといふに據ると、當時在學中に習得した人文的學問の教養と文獻的本文講讀の習慣とは、彼の生涯にとりて最も恵多き賜であつた。この關係は、彼が數年後大學で提出した學位請求論文がやさしくも『母校シユールフォルタ』と捧げられてあるに見ても點頭づかれる。

次は諸大學遊學時代である (一八七四——七九年)。最初はグツチンゲンに學び、次にライプチヒに轉じ、最後はミュンヘンに留つた。

今述べた論文の緒言には、かの校長ヘルプスト

の外に、彼の研究の負ふ所の諸先輩の名が擧げられて居る。その注目すべきは、史學に於てはグツチンゲンの教授ユーリウス・ワイツェツカ (Julius Weizsäcker) と私講師エルンスト・ベルンハイム (Ernst Bernheim) とがある。殊に後者の中古史料の精密に心ゆくばかりの文獻的説明は、頗るランブレヒトを感動せしめた。尙ほフォン・ノルデン (Von Norden) やアルント (W. Arndt) やロツンヘル (Roscher) やが記されて居る。いづれも當時ライプチヒの知名學者である。因みに後年ランブレヒトと多大の關係あるべきヴンド (W. Wundt) がこの頃に既に同大學に來て居る筈であること、しかしその名が前記の内に擧げられて居ないこと、これ併せて注目すべき點であると思ふ。

この際特に留意すべきは、ランブレヒトが當時の青年史家の習ひとして、頗る廣汎なる基礎教育を受けたことである、殊にライプチヒにてはロッ

シエルの講義に待して始めて國民經濟の思想を喚起され、新に獨逸藝術の中心となつたイザール河畔の都に於ては、特に美術史を喜び之にいそしんだことである。この經濟學と美術史とは、法制史と共に、後年彼が大學の史學科學生の修養に必要なる三大參考學科として極力推奨したる部門であるのである。この上記の二部門の知識は、當時諸大學遊學時代以來夙にランプレヒトの頭腦に深く織込まれ、將來史的現象の綜合事業の大成に際し自家獨得の壇場として、彼の特色を成すに與りて最も有力なる要素となるものである。

ランプレヒトは、上述の如く、先輩の感化や教訓の餘澤に浴したのであるが、而も徒らに前人成功の跡を踏むを屑としない。彼は獨立で、法皇グレゴリ七世の時代に分け入りて、遂に『十一世紀に於けるフランス經濟生活に就きて』と題する一個の斬新なる處女作を完成した。即ち是れ、既述

の如く、彼が學位を贏ち得た論文であつて、時に一八七八年二月である。この作が全然一新研究なることは、著者自信を以てその緒言に於て公言する所である。而して序論の終には特に本研究の趣意が明記されて居る。曰く、フランスの第十一世紀は第三階級の活動開始以前の時代が將さに終らんとする時代である、この書の目的は農業自體ではない、農業を營める人民の生活の描寫に在る、この研究の主要部は、當時の自然物經濟を醸成した固有の要素を窮めて、その經濟と、將さに起らんとする貨幣經濟との關係とに及びたるに在るのであると。即ち本論文は純粹の經濟研究ではなく農業生活の歴史を描き、フランス史の一重要期に於ける文化史を構成するものであつた。

同じ年の數月後、更らに第二の論文『獨逸中占に於ける個性及びその理解につきて』が公にされた。本書は、ランプレヒトの精神上發展に取りて

前書よりも一層の意義を有するもので、實に彼の史學上生涯の指針ともなるべき論著である。この書が、三十年後、一九〇九年彼の生涯の大著『獨逸史』完成の夕、之が附録として、最終卷頭に飾られて居るのを見ても、本研究に對する著者自らの評價の那邊にあるかを推想せしむるに足る。全篇僅かに五十頁未滿の一小論文であるが、その研究多方面に亘り、その史料豊富、その描寫自由自在、いづれも嘆賞に値す、而も最大價値は多方面中に統一を立てたるところに在る。彼の考に據れば中古の特徴とすべき内容はその政治史に在るのではない、政治史は固有の國民的發展の只だ徴候だけを示し得るばかりで、その最內在の中心點、及びその成長そのものを語らない。この點につきては、政治以外の法則が行はれ、これを描寫する構圖の礎柱は政治以外に求めらるべきである。國民的發展は民族の組織體オルガニスム、ソシヤリズム、ポリティクスそのものに存在しなければ

ばならぬ。即ち民族の内に存在する諸々の自然的部分、詳しくいへば、民族に於て、國民的個性に依りて常に明白に現示さるゝ諸々の部分に在るのである。是等のすべての部分の發展が明瞭に研究確立せられたならば、これらのものゝ發展を綜合して始めて國民生活全体の進歩如何を歸納し得べきである。故にこの點に於て、個性、族性、團結性、その他の種々の部分の歴史こそ必要なれ、斯くの如きは即ち實に一部分は尙ほまだ解決されて居らぬ問題である。因て自ら敢てその一を試みんとするのであるといふて居る。かゝる趣意の下に彼は諸種の中古史に現はれたる事象を觀察したる後ち、時代全体に亘りて一の共同共通なる根本的特徴の貫通するを認めた。抑も中古といへば、同時代の人士の見聞は狹隘匱乏、彼等の外界に對する知覺感受は淺薄且つ皮相である。かゝる史料缺乏の時代を對象としてその間に統一を發見構成し

たるは、具さにランブレヒトの識見の非凡なるを示すものである。就中彼は中古の幼稚生硬なる繪畫、スケッチ等に現はれたる自然物、生物、人物、風景の有様を觀察し、これを綜合して、その内に於て上述の歴史上重要問題を大綱に摘出して解決せんと試みて居る、是れランブレヒトの史風の一特徴である。彼は固より歴史上事實を新に檢索吟味してその因果關係を結付けたのではない。彼は中古の個人がその氏族(Sippe und Stamm)、その民族・階級(Volk und Stand)に對して、如何なる精神的特質を取り備わて居るかといふことを捕捉し、以て最初、原始的に一樣なる個人から成立したる單純な形體が、如何に發展して、後には漸く思慮あり、生活に富み、多種多様な個人から成つた複雑な形體に變じたかを證明した。彼はかくて中古の發展を叙した後ち、本論文の最後に、國民發展の全体を總括して曰く、『中古の時代は

終を告げた。自由な個性發展に對する重要な貢獻は既に果たされた。過度に強大を極めた國民性の壓制は破れ、非常に跋扈した部族及び部落感情の束縛は解かれた。その代りに、小き、自由なる寧ろより多く時代變化に服従する結合が起り、個人自らの個性の形成場裡となりつゝある』と。即ち都市の商人組合、職工組合の勃興を指示するものである。本研究は之を通覽するに全然新しき題目を對象として、その内に時代の發展變化を描出したものである。後年、ランブレヒトがその『獨逸史』に於て大規模に築き上げたる、最古から現代に至るすべての時代推移の階段的形式は、未だ本論文に於て組立てられて居ない、換言せば、それほごまでに本論文は未だ精透深刻でもなく、はたまた普遍的に要約したものでなかつたが、しかし、その内に、前記のランブレヒトの偉大なる構想の萌芽又は發程點が含まれて居ることは跡か

生活の裕かに風光の絶佳なるは勿論、到る處、ゲルマニ以來の原始的傳説はその山川林地と相纏綿し、文化史上の古跡遺物は無類に豊富である。かゝる環境の自然も將た人も、一として感受性強き青年史家を心から悦はしめないものはなく、之をして自由自在にその驥足を伸ばさしめたい。

さりながら差當りての職能は史學研究ではなかつた、一はケルン市の上流社會ダイヒマン (Deichmann) の家の家庭で、他は同市のフリードリヒ・グイルヘルム中學に於ての教職であつた。この中學の校長は、當時、後には吾が日本にもその歴史を以て可なり知らるゝことゝなつたオスカル・イエーゲル (Oskar Jaeger) であつて、その人文的敎育の奮闘振り、殊に歴史趣味は深く青年敎師を感奮せしめたのである。

しかし幾ばくもなく同地でランプレヒトの生涯の最大機轉が來た、即ちグスタフ・フォン・メヴ

イッセン (Gustav von Mevissen) との關係が始まつたことである。この紳士は、ライン地方の知識ある富豪、西獨の自由派の領袖の一人、嘗て一八四八年の革命に、フランクフルト國民議會に列した當年の志士で老來尙ほその意氣を存し、ひたすら現代の大規模なる物質的生産組織の内から一個の高尙なる精神生活を建設せんと欲した。ランプレヒトはこの老紳士に向つて一八八〇年書面を送り、ライン地方文化の發展史研究の計畫を申出したが、幸にも熱心な賛助を受けたのである。この結果、彼は數年間何等内顧の憂なく、如上の目的達成に全力を傾注し得たのである。之と同年にケルンを距る遠からざるボン大學の私講師に採用されたから、ランプレヒトは始めて大學に於ける授業と研究との生涯に入ることゝなつた。かたがた、茲にランプレヒトは一大著作完成の便を得てこれを一八八五年五月二十日、ゴードスベルグで

彼の保護者の七十歳誕辰に捧獻した。即ち是れ有名なる『中古に於ける獨逸經濟生活』(一)四卷である。本書は分ちて第一部描寫二卷、第二部統計一卷、第三部新公表文書及統計的史料拔萃一卷とし、ラインランドの一部たるモーゼル河畔地方の根本的研究を基礎として居る。斯の種の研究はこれより先、マウレルが試みて、而も獨逸全体に亘らして居る跡であるから(二)今は丁度地方的の必要とする

際で、眞にその嚆矢である。固よりその理論證明の方法や、法律概念の明確さにつきては、當初より批評の餘地ないではなかつたが、一青年史家が着手以來五年未滿の星霜に二千餘頁の大冊を築き上げたのは、ランプレヒトの精力と達識とを證して餘りある。又た本書は獨逸に於て統計を歴史に應用した最初の試で、殊に當時シユモラの新歴史的經濟學派が起りてまだ幾ばくにもならないのでその派の最も早き著作が出て僅かに數年ばかりの

時、早くも斯くの如き根本史料を以て國民の經濟生活を摘抉したのは、史學史上一の驚異の現象である。即ち歴史生活の内に經濟生活を重大視すること斯くの如きは、當時未だ類例尠きことであつたのである。彼の後年の著作を非難した反對派の人でも、當時この著書を賞揚したものが少くはなかつた。かくの如くしてランプレヒトは先づ經濟史家として優に一地步を占めたのである。

上述の素養の傾向が暗示するが如く、彼れは經濟史研究と同時に、おのづから美術史にも亦た興味を有し、ケルン市に居つた時、その有名なる大伽藍の歴史調査に従事したが、その副産物として『八世紀より十三世紀までの頭文字の粧飾』(三)を發表した。つまり頭文字の粧飾方法の考察により、獨逸人の趣味發展の歴史を概瞥したものである。以上述べて來た種々學術上の實績の擧つたのはランプレヒトの年齒僅かに三十歳を超へたばかり

である。彼は銳意勇往一層多きを成さんと欲し、
 而も、單に既成事業中の最重要研究を形造つて居
 る中古經濟生活を紹きて、これを近代に及ぼすば
 かりでは満足しない、彼は全然計畫を改め、眼を
 經濟生活から文化生活全体に轉じつゝあつた。恰
 も當時、かの一八八八年出版の『ライン史小品』^(三)
 となるべき地方史研鑽中のことゝて、先づライ
 ンランドの精神的文化史を志したのであつたが、
 今更に一層眼界を擴大して獨逸史全体を築き上ぐ
 るに決したのである。かくの如く既成の研究を基
 礎とし而も尙ほ舊套そのまゝを襲がず、これを刷
 新更張して一大渾成を期する、是れランプレヒト
 の特徴である。而して彼の如き特殊から發程して
 全體を達觀する歴史家が、恰も獨逸國家統一の完
 成と共に國民的精神の國內を横溢する時期に際し
 て、半生没頭の對象として國史を選擇したのは、
 自然の傾向と謂はなければならぬ。かゝるラン
 プレヒトの史眼展開の產物は、一八九一年以後の數
 年間に『獨逸史』最初の三卷となつて斯界に登場し
 たのである。この大作に用ゐられたる研究方法の
 特徴は、その取扱はれた史料が多方面に亘るとい
 ふ點にあるのではなく、之が扱方が精透にしてラ
 ンプレヒト一流の特徴的なること。歴史を必ずし
 もその年代順に依りて一様に取扱はないで、その
 内容を標準として統一ある編纂を試みたること。
 その内容は精神的文化と經濟的社會的文化とを相
 互關係に相對立せしめたること。而も國民全體の
 個性を明示すべき時代變化の特相を精神生活^{Geistliches Leben}に取
 つたことである。

この精神生活の現象を標準として前記最初の三
 卷に於て取扱はれた時代は、^{ゲルマニ}ゲルマニの古代から
 獨逸國民の中古末までに亘り、^{第一象徴}第一象徴 Symboli-
 smus、^{第二典型}第二典型 Typismus、^{第三偽巧}第三偽巧 Konventiona-
 lismus の順次に名づけらるゝ時代であ

る。かゝる時代推移の階段を區別する根本思想は第一卷の序論にある(四)。既にこれら時代の稱呼が示すが如くランプレヒトの獨逸史は、試みに之れを當時坊間に行はれたる同時代のそれと比較せば頗る斬新警拔の形式を具して居ること一目瞭然である。例へばランケの愛弟ギーゼブレヒトは、この頃、その有名なる『獨逸皇帝時代史』を完成して居つたが、之をランプレヒトの同時代史と相對比するに、何人も容易に立脚地と結構と内容とに於て顯著なる相違を發見するであらう。

(九) Moderne Geschichtswissenschaft, 1905 (英譯 What is History), 2A, 1909.

(一〇) Deutsches Wirtschaftsleben im Mittelalter 4Bde. Leipzig 1885-6

(一一) Maurer, Marken, Hof, Dorf, und Städteverfassung in Deutschland, 1856, 1862-61, 1865-66 u 1869-71.

(一二) Initial Ornamentik des VIII bis XIII Jahrhunderts, Leipzig 1882.

(一三) Skizzen zur Rheinischen Geschichte Leipzig, 1887.

(一四) Deutsche Geschichte 第一卷の現今行はるゝものはその第四版であつて、第一版を擴大改正したものであるから、著者の思想上發展を追蹤するには兩々相對比査照する必要がある。しかし余は不幸にも未だ第一版接手の便を享け得なかつたのである。尙ほ時代名の邦譯は適當の辭を發見し得ず、假に充てたばかりである。

(一五) Geschichte, Geschichte der Deutschen Kaiserzeit, 6 Bde. 1855-95.

四 ライプツヒ時代前期——「史學論争」

ランプレヒトの『獨逸史』は既述の如くそのライオン時代に發端して居る。その内に現はれた史觀につきて一層明確なる追究を試むに先ち、余はこの間に起つた彼の大學生涯の一大變化を概瞥し、且つその際破裂した「史學論争」のことに言及して置かなければならぬ。

多幸なるライオン時代のうちに、既に一八八五年ランプレヒトはボン大學の私講師からその員外教授に進んで居つたが、今や一八九〇年、彼はボン

からマールブルグの正教授に轉じた。マールブルグ在職は極めて短かつた。翌年彼は更に轉じてライプチヒ大學の正教授に聘せられ、茲に再び彼の出生郷里が屬する文化地方の大都、彼の尊むべき母學の一に復したのであつて、眞に錦衣歸郷の觀がある。彼の殘んの生涯二十有五年は即ちこの任地にて終始さるべきであつた。

ライプチヒは申す迄もなく、獨逸國民の東方拓殖地方文化の一大中心であつて、その四方交通の便利、その社交生活の潑刺、その書籍賣買及び出版業の隆盛などが醸成せる一大文化的雰圍氣を以て、ランプレヒトの如き新進有爲の歴史家の休むことなき活動的精神と相交流して、その事業を刺戟助成したるや疑を容れない。殊に注目すべきは從來ランプレヒトの馳聘したる學場は、ケルンといひ、ボンといひ、マールブルグといひ、皆なプロシヤ王國の埒内であつたが、今やライプチヒに

就任と共に彼は始めてザクセン王國の大學所屬員となつたことである。抑もライプチヒの北方獨逸に於ける、猶ほバヴリヤ王國の藝術都ミュンヘンの全獨逸に於けるが如く、ホーヘンツォルレルン家の王城にして帝都たる伯林と相對立拮抗の勢を成すは申す迄もないのである。政治上での聯邦の對立、若くは部落上での地方對峙は即ち精神文化上では二十有一大學の並立となり、而してこれらの大學がおのゝく相競ふて少くとも若干名の無類の異材を珍藏し、世界學徒の隨喜渴仰の標的となつて居るのは獨逸文化の偉觀である。この點に於ても、ライプチヒ大學には近時實驗心理學の泰斗ウイルヘルム・ヴントがあつて、既記の如くランプレヒトの學生としての在學時代、一八七五年以來、そこに帷を下ろして居る。ランプレヒトの學風がヴントに負ふ所あるは有名の事實である。今や彼自らその同僚となり、同大學の珍藏の第二の

異材たらんとするのである。^(六)

然らばこのライプチヒ時代最初の活動如何と看るに、彼はライン河畔に於けるが如く、直接に地方史開發には執掌しなかつたのであるが、同府及びザクセン王國の史學及び文化事業の増進に關しては早くから與りて大功がある。例へば一八九四年には第二回獨逸史家大會はライプチヒに開かれランプレント之を主宰し、頗る得意の境涯に入つた。又た幾多の困難を排して、王立ザクセン歴史委員會 *Königliche Sächsische Kommission für Geschichtliche* を成立せしめた。殊に一八九五年、恰もランケ誕生百年忌といふその年の春、フランクフルトに催された第三回獨逸史家大會に出席してランプレヒトは同會議案の一、如何にせば大學史學科を有功にし得べきかに對して、彼れの提案にかゝる所謂「ライプチヒ案」を殆んど滿場一致を以て承認せしめ、隱然自家史風の凱歌を奏した譯で

ある。但しこの大會には、ベルリン大學の重立ちたる大家は、何故か、唯の一人も出席しなかつた全出席者百二十名中、大學所屬の人は僅かに三十名、他の三十名は高等なる學校の人々、残り六十名は圖書館、博物館の人々と好事家並に公衆であつたと、當年の「ヒストリッシェツァイトスクリフト歴史時報」は簡勁に而も意味ありげに報道して居る。^(七)

さて、この九十年代の前半に於けるランプレヒトの主要事業は固より『獨逸史』の續稿であつた。この頃、第四第五の兩卷三冊出で、十四世紀より十六世紀に亘り、彼の第四の精神文化時代、所謂個性 *Individualismus* の時代の前半期に屬し、經濟生活からいふと、貨幣經濟の勃興を中心對象として居る。

此時に當りてランプレヒトと彼の史風に慄焉たる學者との間に激烈なる論争起り、『獨逸史』の進行は中斷されたる概があつた。

經濟學者、好事家の一群のランプレヒト風を賞玩することに歸して居るのは、一種の理由ある觀察である。反對者のランプレヒトに對する方法は概して、その史觀そのものを云爲するよりも、彼れの取扱ひたる歴史事實を指彈して之を杜撰粗漏なりと告發するに在りて、甚しきは或は剽竊を以て之に擬するに至つた。是に於てランプレヒトは一八九六年の初、週刊雜誌『未來』紙上にその論議を公表し、之を手始めとし、爾來數年間に亘りてその反對者と所謂「史學論争」を開始上下した。

この論争に於てランプレヒトは常に從來の史界を澁滯の状態に在りとし、彼れの反對者を目して政治史派又は少ランケ派と呼び、之に對して社會心理的考察法に依りて歴史法の確立し得べきを主張し、尤も伯林大學のデルブリユック、レンツ、ヘルマン・オンケン、並に當時マールブルグ大學に在つたペーローと相争ふた。此際敵味方雙方共に

動もすれば猛烈に皮肉惡罵を弄し、時に人身攻撃を交換した嫌があつて外國史壇の視聽を惹くに至つたのである。(5) ランプレヒトはランケが嘗て屢々歴史の目的として道破した「本來如何うで有つたのか」*Wie ist es eigentlich gewesen?* といふ詞を捕へて、これでは單に記述的の歴史となる、これを「本來如何う成つたのか」*Wie ist es eigentlich geworden?* と改めて發生的の歴史としなければならぬを論じ、かくランケの發言は、嘗て十八世紀の尙古的學風が、眞の事實の眞相を無視したるに激して發せられたる應症劑であつたことを、宛ら看過したやうであつて、ランプレヒト自身が始めて國民の發展を説くかの如き面持を示した。彼れはランケを以て十八世紀に行はれた民約説の遵奉者とし、甚しきは十八世紀の純理派であるといふ有名なる史學史上の事實を關

知しないやうに見え、ランケの歴史上アイチャ説をば超世的神秘的なりとし、(三)その實は時代の趨勢に關する實際的傾向論であることを無視して居る。ランプレヒトはかのヘルマン・オンケン等に

與へたる書の書き出しに、反對者の知識並に精神上眼界は極めて狹隘である、彼等は肯て研究法の問題に深入りするを好まず若くば能はず、彼等は余の方法上の態度が明確であつて、到底これに抗敵すべからざるを自覺して、何物をも加ふる事が出来ない、敵はすべて戦場に倒れた、余は全然勝利者であると豪語し、自家の必捷を確信し、ランケをモーツアルトに當て自らワグネルに比し、ワグネルの音樂史上に於けるが如く、自ら史學史上新傾向の道程を開始すると思惟した。

是等の言論は、その裡に論者の誇張、不注意、調査の不十分等を裏切つて居る所があることは自明であるが、同時に、史界革新のためにする動機

の熱誠、その意氣の豪壯、斬新なる眞理の或者がそこに存在して吾人を啓發する所實に淺小でないことは、認められなければならぬ。

(一六)昨年ランプレヒト歿するや、老マント (W. Wundt, 1832生れ)これを哭したる傳へられて居る。但し本追憶に除して未だその辭に接し得なかつたのは甚だ遺憾とする所である。

(一七)Historische Zeitschrift Band 75, S. 381

因みに古代史及び史學史上二期期を作らんと、Edvard Meyerの「古代に於ける經濟の發展」講演があつたのは、この大會の席上である。但し彼は當時尙ほヘルマンの教授で未だヘルマンに轉任して居らなかつた。

(一八)Georg von Below, Die Historische Methode 1898 (Historische Zeitschrift 81, S. 194)

(一九)Die Zukunft, 1896. 1903 : Die gegenwärtige Lage der Geschichtswissenschaft, 1896 Feb. 8. u. ff. Zum Unterschiede der älteren und jüngeren Richtungen der Geschichtswissenschaft, 1896 (Hist. Zeitschrift Bd. 77, S. 257—)

(二〇)Prenne, Une historique polemique en Allemagne

(Revue Historique 64)

Lamprecht, Zweitschriften den Herren Hermann

Onken, Hans Delbrück, Max Lenz Zugesandt,

Berlin 1897. S. 20.

(11) Lamprecht, Zum Unterschied op. cit. und Meinecke,

Erwiderung (HZ. 77).

Below, op. cit.

五 ライプティ時代中期——『獨逸史』の

完成 史觀の出處

ランプレヒト半生の大事業たる『獨逸史』は上段
既述の「史學論争」期に於て中止の有様であつた。

然るに二十世紀に入つて、茲に再びこれが稿を續
ぎ、而も中止の後をすぐ受けず、現代に飛び而も
その最新期に著手したのである。

抑も彼の文化時代別につきては、前段既にその
第四時代たる「個性」時代まで言及したるが、この
個性時代は、彼に據ると、十八世紀の中葉に至り
て他の精神生活の顯著なる勃興に遇ひ、それと入

れ換わられる。この新時代は名けて「主觀」Subjectiv-
chismus 時代と稱し、今日に至るまでの獨逸國民
生活を律する。併しこの時代の進行に隨ひ、十九
世紀中葉から、經濟的社會的大變動と並行して特
に一層新しき精神生活が認められた。即ち經濟的
社會的多様複雑なる條件の壓迫の下に、人生が常
住不斷に最も激烈なる刺戟を蒙りて瞬速に感覺し
高度に興奮しやすく、又たかくの如き生活狀態を
享け樂み、之を必要として缺く能はず、つまり、人
生全體が極度の鋭敏性若くば神經質のものに化成
しつゝあるから、この現實の人生の事相を捉へた
のであつてこの主觀狀態を指して特に 銳感
Reizbarkeit といふ新語を設けて命名して居る、
即ち最新の現代生活を律する概念であるべきであ
る。

彼が二十世紀に入つて『獨逸史』の稿を續ぐに當
り、差當り研究の對象としたのは即ちこの銳感
ライプティ時代

期であつた。彼はこの研究に於て自家の史觀を且つ試み且つ確め、『獨逸史』の補卷 *Ergänzungsbände* として二卷三冊を公けにした。

然る後に彼は『獨逸史』中止の跡に立返り、十七世紀から十九世紀まで、即ち個性時代の後半と主觀時代の前半とを、第七卷から第十二卷まで六冊に發表し、かくて『獨逸史』は附録索引一冊共全部合計十八冊大成す、時に一九〇九年八月、單に出版年月を以て數ふるに、第一卷第一版刊行以來實に十有九年に亘り、眞に史學史上の一大記念物を構成する。

こゝに少しく彼の史觀の特徴を窺はむ。

彼は歴史の適法性の可能を立するに、單純なる記述的方法に據らない、専ら發展の歴史を描くに力め、この發展の原動力を個人の個性に求めない、固より偉人の勢力を全然無視したのではないが、單一なる有力人物を發展の基本としないで、最も

重きを時代全體又は人民全體の勢力に置き、以て一般的法則を掴み出さんとす。かくの如くして獲得されたる歴史法は、ランプレヒトによれば、自然界を支配する法則とは異なつて居る。この歴史法は成程自然法と合一にはあらざるも、而も吾人の見によれば、頗る自然法に近きものなるが如くである。何となればランプレヒトは史學と生物學との比當を喜び、實驗的社會心理學に傾蓋し、彼の時代別の標準を頗る唯物的に考へられた精神生活の變化に置いて居るやうであるからである。彼が、時代又は人民の生活全體の發展をば、好んで個人の經過する幼年・少年・壯年・老年の心理的發展に比して居るのは、即ちそれである。かくの如き觀察法によりて、前述の象徴、典型、偽巧、個性、主觀の五大時代及び主觀時代の後期銳感が確立されたのである。

ランプレヒトの反對者は動もすれば、如上の史

觀を指彈して、或はかのコントの實證主義ポジチヴィスムの哲學から換骨奪胎したものである、或はかのブルクハルトが復興ルネッサンスの文化を「個性の發見」と解釋したのに負ふものであるとして、その新味を傷げんとして居る。ランブレヒトは之に對して、ブルクハルトとの脈絡は之を幾分か承認して居るやうであるが、コントとの關係の嫌疑は全然之を否定し、自説を自家獨得のものど主張し、かの『現代の史學』に於て文化時代の發展の心理を論ずる處に「即ち是れ十九世紀前半の佛國と後半の獨逸との社會心理的狀態に於て、如何なる類似的要素があつて、兩者の間に如何なる類似的學說が起るに至つたかといふ問題に歸着するものである」、と彼の學風一流の辯明を試みたる後、尙ほ「余は余が直接間接にコントに依頼アパルチしたといふことを全然否定す、人若し尙ほ之を誣アパルチひんごならば、余は余の勉學時代、七十年代の終に於ける自分の手記が幸に保存せら

れてあるから、その内から之に對する反證を齎アパルチすことが出来る」とまた駄目を押しして居る。(三)蓋しこの七十年代末以來に根源すといふ主張は即ち既述の彼の『中古の個性及びその理解』作成時代を指すであらうと信すべき理由がある。

彼は經濟的社會的要素を以て精神的生活の必要條件となすものである。この點に於て彼はマルクスの唯物史觀の價値を認むるものである。而も彼は尙ほマルクスの史觀を不十分と考へ、これは人生全體の心理的價値を看過して居るとし、その物質的に偏したる點を取らずとして居る。(四)

然らば則ち彼は同時代の學者の内に於て何人を推し若くば取るか。上述の論争期に於て彼が歴史家中稍可なりと許したるは、ベルンハイムであつて、その他を聞かず、而して彼れが始終よく引用典據とする關係學科に於ては、彼の先輩にして同僚たるヴントの實驗心理說尤も顯著である。

されば彼が、十九世紀の文化の産出したる先輩及び同時代人士の文化的思想と、多かれ少かれ、類似又は近接の關係に立つて居ることは、明瞭である。しかしながら、彼の史觀はその大部分、彼自身の頭腦が働き出したる獨得の學說なることは、吾人之れを認めなければならぬと思ふ。但し彼が他と論争を重ねたるに隨ひ、彼の史觀を多少修正緩和し、その誇張を矯め、その粗漏を補ひ、以てその根本的思想を以前よりも明確にし渾成したに相違ない。この點は次段に於て更に説く所がある。

(111) Moderne Geschichtswissenschaft, S. 89 u. Anm.

Einführung in das Hist.-rische Denken, I, p. 1912, S.

45-143.

(112) Dühr, S. 107-8

六 ライプツヒ時代後期——『文化史世

界史』の計劃、史觀の發展

『獨逸史』完成の近づくと共に、ランプレヒトの

生涯は最後の生面に入つた、即ち『文化史世^{ケルツィアウントウニエル}界史』作成の計劃である。彼は獨逸國民に於て形作りたる史觀を他の國民にも適用し得べしと確信し、更に之を一層廣大に適用せんとしたのである。この世界的研究の傾向は、彼の言によると、彼の大學同僚ラツツエル ^{ラッセル} Rassel の民族誌に負ふ所があるといふことである。又た曩に一八九四年有名なる『歐洲列國史』偶監修を缺き後任をランプレヒトに托するや、彼は就任最初の出版^(圖)に緒言して、「ランケの星の昇ると共に個人中心的史觀は殆ど二個の世代を支配したが、今やこの史觀は謝し去り、新に社會心理的史觀代はりて登場す」と豪語したが、當時この叢書の書名は舊に依りて改めなかつたのである。然るに一九〇一年に至つてこれ^{アルゲマイネ、スターランゲンヒテ}を現今の『世界列國史』と改名させた。この改名は即ちランプレヒトに世界史的傾向の起りつゝある證徴である。更らに一層彼を刺戟したのは、

さきに暗示したるが如く、一九〇四年獨米交換教授として渡米したることである。此時ランプレヒトは壯大潑瀾たる新世界の風物を目撃して茲に始めて珍奇異様な文化の存在を發見し、尤も痛切に自家の史觀を擴充して世界文化てふ概念を贏ち得たやうである。^(五) されば彼の半生の事業『獨逸史』の結末に近づくに隨ひ、彼は自家の『文化史世界史』作成の計劃に廣汎鞏固なる永續的基礎を與へんがために、一大研究所設立を思ひ、最初は

大學に於ける在來の機關を擴張して之に充當せんとしたが、故障あつて全然新創立に決し、遂に政府の援助と同情者の出資とを求め、大學附屬王立文化史世界史研究所 *Kgl. Sächsisches Institut für Kultur- und Universalgeschichte bei der Universität Leipzig* を創立し、一九〇九年五月十五日を以て開所した。本所の特徴は科を分ちて豫修科と本科とし、豫修科は史學一般及び文化科學を授けて廣

汎なる基礎的知識を與へ、本科は分ちて單個研究科と比較研究科との二科としたるに在る。^(六) 要するにかの一八九五年第二回獨逸史家大會に提出された所謂「ライプチヒ案」の擴張敷衍である。

ランプレヒトの生涯の晩年約五年の星霜中、特に注目すべきは、前記研究所經營の旁ら幾多の文化策に勞したることである。この點につきて、余は余の見聞とケョツチケの追憶とに據りて次の數件のみを指摘する。一九一〇—一一年度のライプチヒ大學總長在任中、同大學を今よりも閑靜且つ便利なる場所に移轉の計劃を立てたこと、學生組合制の宿弊を改革し、全大學學生を組合學生コルポラチブルと非組合學生ニヒコルポラチブルの二團に分ち、この點に於て範を他の大學に示したること、學習及び研究方法の刷新を謀り、文化史の知識は單に史學科に限らず、苟も精神文化に關する學科に於ても主要なる位置を占むるやうにしたること、いづれも當時の重なる事業

であつた。又たよく講演及び文筆を以て文化に關する時事問題に寄與し、殊に一九一四年、新建の「諸國民會戰」碑下に開催せるライプチヒ出版物世界博覽會には、その「文化殿」を主宰經營したることにも亦た吾人の記憶に新しき事件である。

晩年の述作としては既記「少時回顧録」の外に、次の三篇を數ふべきやうである。一九一二年著『史的思索の手引』、一九一三年著『カイゼル』、一九一四年『獨逸の雄飛・一七五〇—一九一四年』(註)。その内後の二書は余未だ之に接見し得ないが、苟も『獨逸史』の著者にして『文化史世界史』の計劃者たる歴史家が、モロッコ事件以來促進せる最近の世界的危機に際して發表したるカイゼル觀並に獨逸觀が、如何なる種類及び性質のものなるかは想像し難くはない。殊に最後の者は大戰破裂後の執筆にかゝるものなるおや。

『史的思索の手引』は頗る科學的である。或る教

育學上の新叢書の一として刊行されたもので、余の管見を以てして、ランプレヒトの史觀の最も圓熟したところを示して居るやうである。

之に據ると、先づ吾人の眼に觸るゝ點は、彼の史觀の漸次擴大して融通の利くやうになつた所である。即ち彼は彼の文化時代の階段的進行の規則に嚴しく拘泥しなくなつて、正常進行の外に異常進行を許し、彼が立てた歴史法的變遷が時としては常規を脱し異常の道程を取ることあることをも承認した、即ち時間の上に於ては過去の精神生活、空間の上に於ては隣國又は外國の精神生活の影響感化によりて、再生的若くは新來的の偶然なる要素が加はりて、復興若くは攝受を形成することで、是れ彼の史觀をひろく世界史上に適用するやうになつてから起つた必然の結果であるやうである。

次に晩年のランプレヒトは以前よりもより多く

道徳的精神的となり、或る意味では政治的になつたのではなからうかと思はれるところがある。この點で國家と道徳との關係を論する一節を忠實に紹介して見たい。「凡そ國家は經濟及び社會の發展の產物ではない、常に深刻な道徳問題解決の表現である。されば封建國家は自然物經濟の政治的表現ではない、その内在的中核に於ては、中古生活の特徴たる道徳觀念が當時の特有的に拘束を受けて居るものであるから、之に伴ふて居る忠實といふ觀念を基礎として始めて存在したものである。又た專制國家は貨幣經濟に基きて起つたのではない、近代に於て官僚がその服務に忠實に、人民がその臣民たる義務に従順となりたることに由りて始めて成立したものである。然らば則ち、人若し現代國家史、現代政治上理論史を價值ある形體に作成せんと欲せば、先づ道徳史の徹底的研究を行ふべきであつて、さうでなければ到底その目的を

達成し得ないであらう。」(元)と論じて居る。

而も尙ほ同書に於て史的思索法を指示して、「實際上理由によるは勿論、精神的に内在的に發展史的なる理由により、文化史的思索は、美術史から出發するを最も善しとする、この出發點から各時代の精神生活全體を掴み出すことが出来る」として年來の史的考察法を固持主張したる後、さながら豫言者の口吻を以て、「斯の意見が今や輿論の一致の下に行はれ得るとせば、史家は方さしく一個の好位置に立つべきである、好位置とは即ち此の觀念を移入し、一切の文化世界史を人生の自覺そのもの、進展と見做すべきこと是れである」、と附けて居る。(元) 加ふるに、彼は、晩年の發言によつて、凡そ人生の變化を完全に描出するに、只だ直覺的藝術家的立脚點 *intuitiver künstlerischer Standpunkt* を取るを要とし、この態度のみが之を可能にす、歴史生活の全部の再現は科學的研究に

ては不可能である、歴史を書くことは即ち研究以上
に立ちて一種の藝術家的職能を解決することであつて、
即ち存続する現在をその儘感覺するといふ方法を以て、
歴史體の生活を喚起することを果すことである。⁽¹⁰⁾と言ふて居る。
されば彼はその著作に於て常に結構と鈞合とに藝術家的細心なる
注意を拂ふて居る、そは彼の著作の目錄だけを一見して
も何人も直ちに首肯する所である。所詮ランプレヒトの
歴史觀は美術史的僞巧を最便最有功の方法とし、かくて
出來上りたるものも亦た一つの美術的作品たるべきであつた。

由是觀之、ランプレヒトの晩年は、その壯年時代よりも
一層の進境に入居るのであるまいか、就中、唯物的社會
心理から唯心的内省的社會心理に向ひ、漸く微妙なる
思索の域に進んだのではあるまいか。彼は國家並に政治
に對しても、前段引證するが如く、深く精神的省察と
道德的顧慮とを

拂ふやうになつたのであつて、隨て、彼の史觀は、
その發程以來三十有餘年間、中心的脈絡を維持一貫して
居るものゝ、尙ほ一段の精妙圓熟を加へたことを示して
居ると思ふ。現に彼が晩年に近づくに隨ひて、よく引用
した心理學上の典據は、グントの實驗心理よりも、
リップス⁽¹¹⁾の方が多くなつた。リップスはその内省的
哲學的見地を以て有名なもののである。この機微の
間に現はれたるランプレヒト自らの變化は注意すべき
現象であると思ふ。

若し夫れかの當年の「史學論争」の跡を回顧して
冷靜に之を判斷せんか、余は嗚呼ながら次の如く
宣告したいのである。ランプレヒトは當時斬新を
競ひ功名に急いだ嫌があつて、政治上史實の取扱
に於て多少粗漏不備の點がないではなかつた。又
た彼の所謂少ランケ派若くば政治史派を貶せんが
爲めに、史學の宗ランケその者を正當に評價する

こと出来なかつたのである。されば彼は晩年にはランケのアイデア説を評論すること温健となつたのであつて、ランケの發展史的高識をも承認し、人をしてまた二十年前のランプレヒトにあらざるかの感を抱かしめる。翻て所謂政治史派をみるに彼等にありても、亦た弱點があつたのである、即ち彼等の史觀がランプレヒトの極力主張する認識的見地に缺け、社會心理學的素養に乏しきことは明白であつた。さればとて、ランプレヒトの史觀自體が全然に科學的であつて、史學上永遠に確立したる眞理であるかといふに、決してまださうとは言へない。彼が最も成功したる獨逸の歴史に於てすら、彼れがイスマス *Ismus* といふ莊嚴なる學術的抽象的語尾を以て命名した文化時代の階段のおのゝづかひにつきて、多少尙ほ疑問の餘地なき能はぬのである。且つ是等の名稱の附け方は全然同一の統一的見地から出發して居るとはいへぬ。况んや

他の如何なる國民の歴史にも應用し、ひいて世界一般にも及ぼし律せんとする計畫の如きに於ては或は空想に屬しはしまいかと思ふ。只だランプレヒトの史觀及びその方法は、人生が憧憬する文化進展の法則確立の偉大なる試みであつた。それは固より尙ほ一の假定説であつたが、そこにランプレヒトの價値がある。その公衆を喜ばし、學藝界の好事家を樂ましめたるは倍愷き、この一事は専門學者と雖も、若しそれが果して證明確立せられたらば、固より之を歓迎すべき筈であつた。つまりランプレヒトの史學史上の發現は史學界の大試みにして、人生の學術上憧憬に投じたる一大刺戟であつたのである。

(二四) Europäische Staatengeschichte gegründet in 1829 von Heeren und Ukert : Brückner, Gesch. Russlands, 1894, Vorrede.

(二五) Americana, Freiburg, 1906.

(二六) Zur Universalgeschichtlichen Methodendichtung (im

Bd. XXVII der Abhandlung der Philologisch-Historischen Klasse der Kgl. Sachs. Gesellschaft der Wissenschaften)

Historische Methode und historisch-akademischer Unterricht, Berlin, 1910.

この時間所記念として、ランプレヒトのライプチヒ在職時代の學生であつた二十二名の歴史家が、各自論文一篇づつを寄稿して、「ライプチヒの研究」Studium Lipsiense, Berlin 1909. が出版された。寄稿者の内に Goldfriedrich, Helmolt, Jorga, Kätzsche 等の相當知名の士がある。論文の問題は古今東西に亘り、多方面である。本書は前記の記念であると同時に實にランプレヒトの學風を示す好史料であらう。

- (一) Einführung in das historische Denken, Ipz. 1912
- Der Kaiser, Berlin 1913
- Der Deutsche Aufstieg, 1750-1914, Gotha 1914.
- (二) Einführung S. 120
- (三) Dito, S. 129-130 u. Anm.
- (四) Kätzsche, S. 173
- (五) Moteme Geschichtswissenschaft (S. 19), ランプレヒト

トが、この書の基礎たる米國講演の動機をリップスの心理學 (Lipps, Leitfaden der Psychologie, Ipz. 1903) に歸して居るのは最も顯著なる證據である。

七 史學史上の位置

斯の歴史家の眞價は、將來の世代に於て、一切個人的繁累の永久に葬り去られたる時、始めて確定するのであらう。しかし今日、諸君と共に斯の人を追懷するに當り、彼に對して、この瞬間に於て可能なるだけの史學史上正當なる供獻が無くてはならぬ。余は故人自らに固有なる思索形式に則りて、その人の圖像を描き定めて見やう、曰くカール・ランプレヒトは主觀時代の後期、銳感期の歴史家、印象派インプレッションから新理想主義ネウイデアリスティスムへの過渡期に於ける歴史家であつた。(三)

これにつきて、尙ほ少しくより具體的にその人を憶はんか。(三) 彼は穎敏な實感性を以て人生と世界とを自然派的に捕捉理解したる後、これを基礎

として形式内容を苦心作成し、一個の新理想主義に到達しつゝあつた。彼の着眼は常に人生全體に在つた。その諸生に對して、教壇に立ちて教ね或は演習室に入つて指導するや、博覽強記、引証多面、感想湧くが如く、辯舌流るゝが如く、熱心倦むことなく、又たよく個人の傾向性情に適應して懇切に誘掖した。人となり、剛健不撓、尤も男性的にして權威に屈せず、人に對する其意志極めて鞏固、而も其心底あくまでも親切にして信義を以て交はる、只だこの信義破られたる時始めて激怒す。彼の左右の告ぐる所に據るに、事に當りて艱難を辭せず、六十年の生涯、一艱又一難、踵を接して相つぐも、彼は勇みて之に對抗し、不斷の活動を以て最も壯烈に奮闘し、之に打勝たずんばやまず、一勝一利、愈々高遠なる目的に尙て突進す。未だ嘗て瞬時も靜止安息したることなき、常住の發展、その裡にランプレヒトその人の人格の借調を見る。

彼は常に學術そのもの、新企業家たるのみならず、苟も文化増進に關する事業の計畫家經營家であつて、或る場合には少くともその獎勵者であつた。彼が與へた暗示刺戟によつて成立し永存して居る事業頗る多い、就中彼の生涯に取りて最も尊きラインランド地方とザクセン＝チューリンゲン地方とに於て尤も然りとす。既述の重なるもの、外に、前者に於てはライン史學協會 *Gesellschaft für Rheinische Geschichtskunde*、後者に在りては月刊雜誌『*ドイツ歴史年報*』の如きは尤も記すべきものである。要するに彼は猶ほ資本界に於ける大組織家の如く一切の惡しき意味を離れて、いはゞ學界に於ける大規模なる企業的組織家であつたのである。

彼身體巨大、健康無比平生何等の漫性的疾患に惱まされて居なかつた、昨一九一五年春ベルギー及び北佛に於ける戰時占領地視察の途に上り、一日西部戰地に於て四十餘年前の中學同窓、宰相ペー

トマン・ホルウエヒ帯同の下にカイゼルに謁して自ら壯にし、首尾よく任務を卒へてライプチヒに歸るや、身神過勞の結果、忽然逝去した、時に五月十日、行年六十歳。

終に臨みて、すゝろに吾人の感慨を惹くべき一事がある。ランブレヒトがその史觀を獨逸以外の國民に適用し始むるや、彼がふかく注意を寄せたのは新世界の文化と共に極東の文化、殊に吾が日本國民の發展の上であつた事である。彼の論著に於てその史觀を適用する毎に、言必ず日本の文化發展の事に及び、少くとも日本國民の名だけでも舉げるを常とした。彼の研究所には開所以來常に若干名の日本の學徒ありて、その故國文化に關する部門を囑托され、同所の大目的に協力して居る。彼既に日本に多大の興味を有し、日本美術から出發してその文化を考察しつゝあつたが、更に親し

く實地を視察して彼の『文化史世界史』の建設に資せんと欲し、一昨年その秋を期しての來遊の計畫殆んど成つたといふことで、吾人竊かに鶴首之を待ちつゝあつた。偶大戦勃發して彼遂に來なかつた。而して祖國及び文化のためにいはゞ間接に殉死を遂げたのである。

若し現下の國際的大變動が起らなかつたならば吾が日本の史界は、この最も感化力に富んだ歴史家を歓迎して、必ず何等かの具體的刺戟を享け得たであろう、將た又た彼自らも極東文化の直接觀察により、かの十年前の新世界文化のそれからの如く、必ず何等かの好影響を感受したであろう。更に進んで考ふるに、よしや彼れが事實日本に來遊し得なかつたにしても、若し尙ほ永く生存し得たならば、不斷の發展を生命とするこの歴史家は、靜かに且つ痛切に、戦局の進行と文化の歸趨とを考察して、自家四十年來の史觀を如何に適用し若

くば試鍊したであらふか。吾人は上に述べ來つた如く不十分ながらも博士の戦前に於ける發展を髣髴し得たるが、博士の尙有爲の境涯に於ける突然の永眠が、戦時及戦後に於てまさに有るべき博士の發展實見の機會と、これに頼りて享くべき學界の福利とを併せて奪ひ去りたることを、諸君と共に深く悲まねばならぬのであります。(完)

(三二) Koetschke, S. 184

(三三) Ditto und Armin Tille, Nachwort. (Deutsche

Geschichtsbücher Bd. XVI, Heft. 7.)

新見吉治 嗚呼ランプレヒト教授(學校教育二、九 大正

四年 廣島)

石橋智信 ランプレヒト氏の東亞學上の學說説及び事業(

東亞の光、一〇、八 大正四年 東京)

阿部秀助 現代の史學とランプレヒト(歴史地理二六、二、

大正四年 東京)

Frankfurter Zeitung 1915 Mai, 日を選す

Vossische Zeitung 1915 Juli, 日を選す

第一卷 叢説 日本出土の支那古鏡

日本出土の支那古鏡

富岡謙造

支那に於て、鑑又は鏡の字は古より存す。是は人の容姿を映寫する「カ、ミ」の意義に、使用したるは『毛詩』(擲風栢舟)に、

我心匪鑒、不可以茹。

とある如き、その最も古き例とすべし。然れども、

此のものは、當時また別の用法ありしと見ゆ。『周禮』(秋官司寇)に、

司烜氏、掌以夫遂取明大於日、以鑒取明水於月、以共祭祀——

と云へるは是なるべし。春秋以後、『莊子』『韓非子』等諸子中に往々鏡の事を云へる句あれど、未だ先秦の眞物の現存せるものあるを見ず。近く去る五月末に、沙市の上なる枝江縣にて、楚の成王の墓を發見して、一大銅鏡を得たりと傳ふるが、

第四號 一〇九 (六七四)